

江戸から現代まで

# 達生堂の歩み

清和源氏の流れをくむ達生堂

## 達生とは

中国の思想家、荘子の言葉に、「達生」があります。

「人生の達人」となるための逸話として、紹介されています。無となって自然にまかせて生きることにより、ストレスや憂いのない、幸せな人生を送ることができる、という意味として紹介されています。

## 達生堂を興した多田家のルーツ

多田家のルーツは、清和天皇を祖とする多田源氏の流れと伝えられています。多田家の家紋は、「笹竜胆（ささりんどう）」で、清和源氏の流れをくむ多田源氏を祖先としています。



笹竜胆

平将門の乱で活躍した源経基の子、源満仲（多田満仲）は摂津国川辺郡多田庄（現在の兵庫県川西市）に入部、多田神社が創建されました。満仲の孫に当たる源頼義とその子の義家は、奥羽凱旋の帰途に現在の東京中野区に多田神社を創建しました。

内	全	内	小	全	全	全	内	内	全	全	全	内	全	全	内	全	
新橋八官丁	三十間堀二丁目	小川丁	白川八丁堀亀島丁	宇土末挽丁五丁目	木町一丁目	堅田上藩	笹山下藩	内	本郷五丁目	濱田中藩	下谷金杉一丁目	彦根中藩	内	本郷五丁目	笹山上藩	内	
高田玄令	田中玄道	田中宗榮	田川冲琢	橋養浩	田丸長卿	竹中道温	大道寺同林	鷹巣友仙	武邨隆長	武田春庵	田中宗我	高木祐益	多田順静	多田龍齋	多田順静	多田順静	多田順静

『江戸今世医家人名録』 出典「慶應義塾大学信濃町メディアセンター  
(北里記念医学図書館)」

江戸時代の徳川家家臣を網羅した『寛政重修諸家譜』によると、甲斐の国で武田信虎、信玄のもとで武勇をはせた多田淡路守の子供が武田信玄に仕えました。武田氏が滅亡した後は、孫の正吉が家康の家来になったと記されています。多田家系図では淡路守の子孫が、徳川家の奥医になり、代々奥医をつとめたと伝えられています。

## 江戸の内科、産科医、多田龍齋

多田家の家系図によると、多田良益から多田龍齋まで13代にわたって名前が不詳になっています。多田龍齋は、1819（文政2）年に発行された『江戸今世医家人名録』にその名を確認することができます。

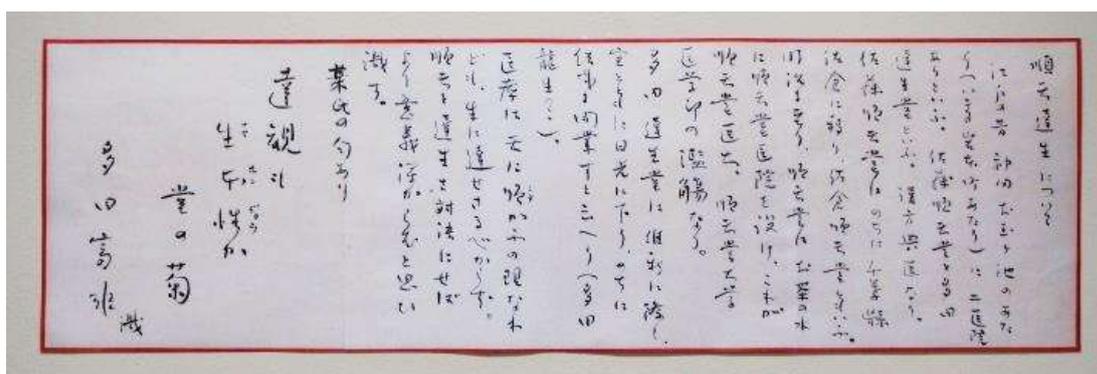
人名録では、多田龍齋は内科と産科を本石丁二丁目で診療していたと記載されています。この住所は、現在の東京都中央区日本橋本石町2丁目と思われ、現在は日本銀行本店が建つ東京の中心地です。江戸時代後期、このお玉ヶ池周辺には儒者、漢学者などが多数住み、学問の中心地でもありました。



本石丁二丁目は江戸城のすぐそば（右の黄色いピン）  
の場所）お玉ヶ池も近い（右 google earth）



お玉ヶ池跡



多田富雄による書

多田富雄氏は書の中で「神田お玉ヶ池のあたりに二医院ありといふ。佐藤順天堂と多田達生堂といふ」と記しています。多田達生堂は、多田龍齋の営む医院と考えられ、佐藤順天堂と呼んでいる医院は、当時、和田塾として創設され、後に千葉県佐倉に移り「佐倉順天堂」、東京に戻り「順天堂医院」となって、現在の順天堂大学に受け継がれている和田塾を指しているものと考えられます。

## 現代医療の先駆けとなった幕末の医療

江戸時代後期の1830年代から、アメリカは日本に通商を求めて度々来航。開国への機運が一気に高まるのを恐れた幕府は、シーボルト事件や蛮社の獄をきっかけに、蘭書翻訳取締令を出すなど、蘭学に対する弾圧を強めました。医学に対しても幕府の医師に対して蘭方を禁止するなど、西洋の医学に対する規制を強めていました。

こうした時代に生まれたのが、お玉ヶ池種痘所です。「天然痘根絶史—近代医学勃興期の人びと」（深瀬泰旦著）によると、1857（安政4）年に蝦夷地（北海道）での天然痘の大流行に頭を痛めた幕府は、牛痘接種による天然痘の流行を抑えるため、蝦夷地で種痘に携わる江戸の町医を募集。これを契機に、医師83人が共同出資し、東京大学の前身となる「お玉ヶ池種痘所」が設立されました。



お玉ヶ池種痘所の記念碑

日本でこの時代に行われた医療は、オランダから来た蘭方に対し、従来の医療を本方という呼び方をしていたといいます。しかし、医療に対する取り組みは、1774（安永3）年に『解体新書』が刊行されるなど、当時の医師も積極的に海外の新しい技術を取り入れようとしていました。

1819（文政2）年に発行された「江戸今世医家人名録」に、多田龍齋の名が記されていますが、この人名録では診療科として内科、外科、産科、婦人科、小児科、眼科、口中科、正骨科など現在も目にするさまざまな診療科目も並んでいました。

## 順天・達生

多田富雄氏は、達生堂について『達生という名前は、多田の先祖が徳川家の御典医として神田お玉ヶ池に医院を開業していた時の院名「多田達生堂」からきている。隣にあったのが「佐倉順天堂」で、現在の順天堂大学の前身である』と記しています。

「順天」は、中国の古典「易経」にある「順天応人」（天の意志にしたがい、人々の期待に応える）と、孟子の言葉の「順天者存 逆天者亡」（自然の摂理に従うものは存続

して栄え、天の理法に逆らうものは亡びる)に由来しています(順天堂大学のホームページより)。

達生は、『莊子』の外篇に収められている達生篇に由来しています。「達生之情者…(生の情<sup>まこと</sup>に達する者は…)」で始まり、人生の達人となる境地が、無心となって自然に従うことにより得られる姿を説いています。

### **達生堂をルーツとした明治から平成の歩み**

多田家の家系図によると、多田龍齋の子、16代多田立碩は、下総国真岡から水海道に移り、結城に来たとされています。1909(明治42)年の「日本杏林要覧」には17代の多田貞一郎と多田愛治がともに現在の結城市結城で開業していることが記されています。

1981(昭和56)年4月、20代の多田正毅理事長が、医療法人「厚友会」城西病院を開設。「地域医療から地球医療」を合言葉に、救急指定病院として地域医療を担うとともに、介護・福祉分野でも特別養護老人ホーム「ヒューマン・ハウス」や介護老人保健施設「すばる」を運営。開院の翌年からインドシナ難民支援やアフガン難民支援、タイ、ミャンマーなどの医療支援活動を展開。現在は、公益財団法人「茨城国際親善厚生財団(IIFF)」としてタイ北部のメーサイ市を拠点に、国際的な医療支援や医療交流を進めています。